

僕らの書展 2014

若いつて素晴らしい！と思うと同時に、羨ましいと思わせる書展に出くわした。昨夏、東京池袋・東京芸術劇場（五階）で開催された「僕らの書展二〇一四」である。

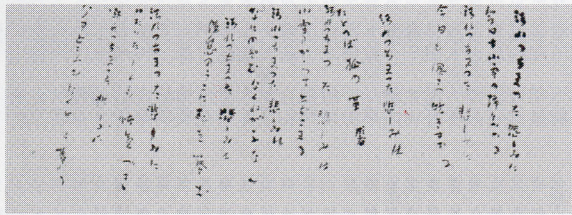
書の世界にある人は、善きにつけ悪しきにつけ、少なからず書道界の旧弊の柵を経験している。それに不思議なことながら自分が習っている時は指導者の学書の方法論や陋習に疑問を抱きつつも、今度は、自らが指導者になった時

ての臨書ではなく、師の眼を通しての書を学ぶことになるのである。この結果、社中展が師風一辺倒の無個性といった作品の羅列になってしまっている。

それは兎も角、こうした柵を吹き飛ばす「僕らの書展二〇一四」は、東京学芸大学卒業生、社会人なりたての一名以外は、東京学芸大学学生三名、筑波大学生一名、静岡大学生一名、大東文化大学三名計九名（内女性二名）からなるフレッシュな人員構成である。

まず注目されるのは、九名による超大作群から発せられるエネルギーな圧倒的筆力作である。最大38×38作を筆頭にそれぞれが思いの丈を大幅の紙にぶつけている。書が書斎人の嗜みとされる一方で、芸術書として大会場に展開の場を移した。書の特性は言葉を扱いメッセーjジ性をも持つ。今日の芸術は、作品そのものに作者の主張が要求されるが、書として例外ではない。造形性を弄ぶだけでは単に表現しただけのものにすぎない。「何を思い何を伝えたいのか」社会に向っての訴求力を問われる時なのではなからうか。

佐藤 達也 〈汚れつちまつた悲しみに…〉（中原中也詩）180×493



はその矛盾に気が付かず、その習性を再び犯しているのである。端的に言えば、学習の根本のことである。漢字やかなの学習には古法帖や古筆を手本を参考とするのが常識だが、始めは師の臨書したものを学ぶことが多い。ここに既に師の強い個性ある書を身につけることになる。それは自らの眼を通し

秋元央嗣「動」の気魄、泉諒治「挑」の豪胆、伊藤聡美「露」の風狂、内野直弥「衣」の懐抱、岡祐樹「残響」の混沌、佐藤達也「汚れちまつた悲しみに」…中原中也詩」の感性、長谷川結「さか」の現代感、早川燿「春夜・蘇軾詩」の規範性、前田耕作「臨論経書詩」の温故の各作には規制に捉われず、自由を謳歌する中にも、真理を求めて大いなる飛翔の予感がある。これぞ期待すべき、若き書の群像である。

編集後記

△一月の書道展は、正に百花繚乱の趣でした。二日から書展の先陣を切って上野松坂屋に於ける「現代書道二十人展」に始まり、四日からは東京都美術館の「東京書二〇一五公募団体の今」、五日からは銀座・和光会場、セントラルミュージアム銀座の「現代の書新春展」、二十八日からは日本橋高島屋の「現代女流書一〇〇人展」、その他、大型の書道団体展、社中展、個展などの開催に合わせて祝賀会が続き、気が付くと既に二月を迎えて、光陰矢の如しの格言をつくづく実感したことです。

△民間賞として最も権威のある第五十六回毎日芸術賞の授賞式が、一月三十日都内文京区の椿山荘ホテル東京で開かれました。書道界からは三年ぶりに船本芳雲氏が選ばれました。今日の書が他の芸術分野に伍して認められたことに意義深いものを感じますが、自らの言葉で表現した「詩書一体」の渾然世界の証明と言えましようか。

▲日展会員浅見錦龍氏が一月二十八日、急逝されました。九十二歳古典主義を貫き、独自の混沌たる連綿草から、晩年の融通無碍の世界に遊んだ境涯は、若き日、零戦を駆って大空を飛翔した心境に相い通じたのでしょうか。ご冥福をお祈り致します。

△三月号をお届けします。本号は独立書展、正筆展、日書学展、香坡の書画三昧展の特集としました。独立書展、日書学展は繁忙の中、柳碧鮮氏、三上栖蘭氏の手を煩わせました。深謝です。あと二展は桑原が担当しました。(A)

書道

平成二十七年三月十二日印刷
平成二十七年三月十五日発行

定価八二〇円（本体七五六円）
（千八〇円）

編集人 麻生 泰久
発行人 桑原 孝夫
本文印刷者 春山 孝夫
東京都千代田区神田神保町三丁目一〇
印刷所 松本喜美雄
東京都杉並区和田一丁目五番二一号
印刷所 松本精喜堂

発行所 株式会社 五禾書房

〒101-0061
東京都千代田区三崎町二丁目四番三三号
電話(03)(3336)八六八八(代)
FAX(03)(3336)八八九〇
振替〇〇一五〇一―五九一五九